

自民党総裁選挙と私の立場

聞き手・「エコノミスト」編集部

初の党員党友参加の選挙を前にして、政治、経済、外交、防衛など、広範な分野にわたって自説を展開。最後に「手応えのある人生」を送りたいという人生論で結ぶ。

公選は当然のこと

自民党は初の総裁公選を間近に控えて、すでにいろいろな連携なり密約がうわさされていますね。しかし、ともかく諸悪の根源といわれた総裁選挙が、初めて一五一万の党員、党友によって行われ、党近代化への道を辿ろうとしている。一つの前進だと評価されていますけれど、総裁公選の意義についてどう考えていますか。

大平 意義というような面倒なものじゃない。自民党のリーダーを、任期がきたから定められたルールに従って、選ばうということに過ぎないんです。これまで国会議員と一部の代議員だけで選んでいたのを、今度は予備選挙の段階で党員、党友の人たちに参加してもらおう。締めくくりの決定選挙は国会議員だけでやることになった。つまりルールが変わったというだけのこと、当然しなければ

ならないことをいままでもより若干進んだ方法、もっと開かれた方法でやろうというにすぎないものです。自民党が、そのように考えておるといふことに理解をもって見守ってもらいたいと思つてんです。ただそれだけのことなんだが、たまたま自民党の総裁は総理大臣になる可能性が濃いから大きく問題にされているけれども。

結果的に総理大臣を選ぶことになるので、一つの政権争いの要素があるわけですね。それならば、立候補者の考え方を国民の前にはつきり打ち出した方がいいんじゃないでしょうか。

大平 そりゃ、当然じゃないでしょうか。だから立候補したらやりますよ。立候補しないのにそんなことをやったらそれはおかしい。それは一月一日の立候補受け付け以降やるのが筋でしょう。一月いっばいたつぶり時間をかけてやりますから、その間面倒がらずに報道して下さいよ（笑）。候補者間の政策論争は当然あるでしょうね。でないと党員、党友が候補者選択に迷いますからね（笑）。

非常に画期的な選挙ではあるんですが、現実には系列による票集めが先行しているようですね。下手をすると、全国的に派閥抗争を拡大してしまう恐れもあるんじゃないですか。

大平 自民党の党員、党友は自然にわいてきたり、自然に名乗ってくれるわけじゃないので、参加をお願いしているわけです。そこでこれをお願いするのが、国会議員であり、県会議員であり、市会議員その他の人たちです。これらの人たちは自民党の党員ではあるが、一〇〇%共通の性格があるんでなく、それぞれの系統があります。私が総選挙をやる時でも、私の運動員が私の票を拾うために一生懸命に働いてくれないと選挙には勝てません。つまり皆がそれぞれの立場で、自分たちの勢力をこの機会に伸ばしたいという気持ちがあつても別に不思議はないし、そうでないと現実の政治行動なんかできないと思えます。

政治というのはそういう生臭いものです。それがいけないとなると、仏様や神様みたいなものが集まってやることで、政治ではなくて神事になってしまふ。政治はそんなものじゃない。しかし現にやっていることは、そんなに狂ったことをしているわけじゃない。ともかく自分でできる限り黨員や党友を集める。これは大切で尊いことではないかと思うんです。そうでない限り、党勢なんか拡張できません。しかしかくして参加された黨員や党友が、総裁公選にどういう選択をされるかは、全くその人の自由な判断によることです。

これが買収みたいな形になったら、弊害は非常に大きい。

大平 だから弊害を防ぐために、こんどは裾野を拡げて一五一人でやってもらおうというんです。それで皆さんもなかなか読み切れないんじゃないですか（笑）。

平常心で対処する

そういう公選を目前にして、大平さんの心境たるや複雑なものなのか、あるいは淡々とした明鏡止水的なものなのか、その辺はどうなんでしょう。

大平 明鏡止水というほど澄んでもいないが（笑）、かといって気が狂うほど緊張しているわけでもない。できるだけ平常心をもって対処したいと思っています。

最近の「支持政党なし」、いわゆる政党離れとか、政治に対する無関心層みたいなものが増えている点については、どう思っていますか。

大平 それは政治が、どうでもええ、ということではなくて、自民党がやってくれて、それ

にわれわれは、手を貸すつもりはないという方々でしょう。しかしそんなことができるのも、自民党が力をもっているからのことではないでしょうか。ところがこの政界の予備軍みたいな無党派層が、少しずつ着実に増えている。これは日本の政治の最大の問題です。この人たちは、自民党がおかしなことをやると、ちょうどロッキード事件のときのように反対党を支持する。それが一つの勢いになると自民党が弱体化してえらいことになる。そこでできたら、そういう無党派層の方々がわれわれの陣営に多く入って欲しいと思うんです。今日のようにこれがジリジリ肥大化していく現象は、よほど警戒すべき事態だと思えます。

そういう無党派層が、こんどの総裁公選をじっと見ているわけですから、よほどフェアにやらないといけない。

大平 総裁公選というのは従来もあつたし、話し合いの場合もありました。しかし話し合いは、密室政治でよくないという批判があつた。公選は民主的なものとして一般の人たちから支持を受けていると私は思うんです。今回、自民党は新しい公選に踏み切つた。大変手間のかかる仕事だけれど、一五一万もの有権者に参加してもらつ決心をした。このことはやはり買ってもらいたいことです。われわれ弱い人間のやることですから完璧なことはできないかも知れないが、精一杯やろうと努力しているので、寛容な気持ちで見守つて欲しいと思います。

実力者の間で話し合いによる立候補の一本化、というような話も出ていますね。しかし公選の建前になると、これはあり得べからざることですな。

大平 立候補するしないは、各人が決めるわけで、立候補者の自由意志です。そして出た人たちによつて選挙が行われるわけです。もともと話し合いの原理と違つた原理です。

大平さんはもう立候補を決めているわけですね。

大平 私は一月一日から四日までの間に自分の態度を明らかにしなければならぬ、と思っております。だから一〇月三十一日までは、この問題について何とも申し上げる立場にないわけです(笑)。野暮っただけだけれど、そういつけじめをつけておかないといけない。いま立候補の発表をすると政界はてんやわんやになってしまいます(笑)。だからさういつ手にはのらんことにしている(笑)。もちろん、出ないといっても、同様問題になりますけれども。

しかし公選の見どころは、予備選挙で誰が一位と二位になるか、ということでしょう。そして本選挙で二位が逆転当選する可能性はどうなんでしょう。

大平 それはあり得るでしょう。予備選挙で二位の人を、本選挙で投票してはいけないという規程はない。われわれは規程通りに総裁を選ぶので、逆転ということも論理的には可能です。

一五二万の直接民主主義で選ばれた人が、本選挙で逆転されるというのもちょっと問題があるように思えますけれどね。立候補者が二人しか出ない場合には、とくに問題でしょう。

大平 とまかく規程通りやる、それ以外にやり方はないということです。

見通し持つのが政治

立候補者の政見は、一月一日以後に出てくるんでしようが、もちろん自民党の政策のワケは決まっているわけですから、大筋ではそんなに違わないということになりますか。

大平 議会制民主主義とか、自由な市場経済の運営、国際協調、安全保障など大きな枠組みについ

てはだいたい決まっています。その中でどういうところにアクセントをおくか、どれから先に手を付けるか、あるいはその方法は、人の顔が違つように、違つてくるんじゃないかと思ひます。立党以来、福田さんが八人目の総裁だけれど、総裁が変わることに政策がどう違つたということが問題にされた。総裁の応接室に歴代の総裁の写真があるが、それぞれ相当個性的な方々ですね（笑）。みんな自民党のリーダーとして、党是を踏まえて、それぞれやつてこられた。しかしいろいろ言い回しも、やり方も違つていたんじゃないですか。いつの場合でもそうですよ。

見通しのきかない時代のように思ふんですが、こういふとき政治はどんな手法が必要なんですよ。

大平 見通しをつけることに全力をあげなけりゃいかん。見通しがついておるときは、政治というのはやさしい。見通しがハッキリしないときに、その見通しをつけて、そのレールに皆を載せていくには、いままでの何倍もの努力がいるんじゃないだろうか。

何かドラスチックな転換をはかりたい、という気持ちがあると思ふんですけど、なかなかそれができない時でもありますね。

大平 国民のもっている不安、期待、願ひ、そういうものに勇敢に挑戦する勇気がなければいけない。国民と一緒に苦しみ、一緒に喜んでいく気概がないといけない。むずかしければ、むずかしいだけ、一層勇気が要るんじゃないだろうか。

外国の政治家で非常に感銘を受けた人はありますか。

大平 ドゴールとか毛沢東というのは、スケールが大きいという感じがしました。あとは魅力を感じるとか、教えられたりした人はいろいろあるが、スケールが大きくて、手が届かるところにおると

いう感じの人は少なかったようです。

これからはスケールの大きいものはかり狙ってもむずかしいですね。

大平 狙ったってなかなかありませんからね(笑)。当たり前前の心構えで対処するより手はないでしょう。私は地で行くよりしょうがないと思っています。

大平さんの地というのは「一利を興すは一害を除くにしかず」という言葉に表現されるようなところなんでしょうか(笑)。

大平 その通りです(笑)。

日本文化は外来文化を取り入れて、日本的に加工した特殊な文化を形成してきましたが、経済の面でもそうでしょうか。しかしこれからは未知の時代にはいつていくわけで、サル真似的な加工ではだめだといわれている。そういう意味で、日本人の創造力をどう評価されますか。

大平 やはり日本人的創造力でやっていけると思いますよ。日本人はそれだけの素質も能力ももった民族だと思います。

ただ国際社会での付き合いは、ちょっと下手ですね。

大平 スマートじゃない。けれども日本人は日本人らしくやっていいんじゃないでしょうか。背伸びして歩く必要はない。言葉は下手なままで足は短いままでいいが、日本人としていうべきことをいい、やるべきことをやっていけば、誰はばかることはないんじゃないだろうか。しかし若い者はずいぶん国際化しましたね。教養的にも、われわれと違って、そこは余程進んできたように思っけれど。

そういうことを世界も認めてくれて欲しいということがあるけれど、たとえば日本人の英語なんか一つの方言として認めさせる必要もあるんじゃないでしょうか。

大平　あまり英語的英語でなくてもいいんじゃないだろうか。とつとつとやればいいと思いますね。世界もだんだん認めてくる。現に経済外交なんかでも、日本がはいらないと国際会議にならないんじゃないでしょうか。日本の力は最早そうなつてきております。

与野党、話し合いで

大平さんは与野党伯仲時代の国会における国会運営は、野党との部分連合を尊重しなければならんと考えていられますね。

大平　与党、野党の話し合いということは、基調としていつでもやらなければならんことです。それはきょう結論が出なくても、将来、実を結ぶこともありましようし、形の上で何らの結果が出なくても、話し合ったこと自体に意味のあることもあるでしょう。

たとえば野党は所得減税を要求していましたね。野党の要求は通らなかつたわけですが、その間の話し合いが将来生きてくるといふことですか。

大平　減税問題は今国会の対立した問題の一つでした。したがって何とか処理したいと思つたけれど、結果的には意見のズレ違いに終わった。結果的にはそうであっても、いま話し合ったことが、将来、与野党の間の問題、減税に象徴される財政とか経済問題の処理に何か役に立つものにしたと思つていたし、恐らくそうなるだろうと思つています。だから与野党間の対立の処理は、将来、何らかの形で役に立つような処理の仕方でありたい。

こんどの補正予算は景気対策として出されているわけですが、まずこれで国際公約の七%成長

は達成されると、幹事長としてみていますか。

大平 政府は可能だ、とっています。政府のいっていることが正しいかどうかは、国会で論議されると思います。私は七%成長は、これが可能であるか、可能でないか、ということが問題の焦点ではなくて、問題はいまの経済をどう診断するか、ということがベースにあると思います。なんとすれば、政府はこうすれば七%の成長は可能だという見方をしているが、それにはそのベースになる一つの診断があるわけです。それが正しいかどうか問題であるという感じがする。

現在、一般消費税が考えられていますけれど、国民の側からみれば医師優遇税制、企業優遇税制など不公平税制を放置したままの増税には大きな不満があるし、物価上昇は避けられないということもある。一般消費税について幹事長はどう考えていますか。

大平 いまの財政状態を診断して、増税をしなくても、歳出をカットしていくんだということでもセンサスが得られれば、それは一つの解決方法でしょう。しかし新たな財源が要するというのなら、それを公債に求めるか、税に求めるかという問題が次にあるわけです。ところが公債は先進国のなかでもいちばん依存率が高いし、こんなに国債を出している状態からは早く脱却しなければならぬ。公債の消化自体にもすでに赤信号が出ておるんじゃないか。そうすると公債によらずに税によるべきだという場合に、ほかの先進国より所得税負担が非常に低いから、まず所得税をもう少し上げる。法人税は私は先進国並みの課税になっておると思います。だから所得税でいくのか、新たな一般消費税みたいな形でやるのが次の問題になってくる。日本の税体系は直接税偏重になっておる。大体、七割が直接税ですね。それが諸外国では逆になっている。間接税にウエートがかかっているから、日本でももう少し間接税に財源を求めるべきではないか、という考え方に政府はだんだん傾斜している。そ

れで税制調査会に検討をしていただき、国民の理解と協力を得られる形での一般消費税という方向を打ち出してみたのではないでしょうか。私はいまの政府の態度でいいんじゃないかと思えます。時期も明示してないし、税率も書いてない。注意深い調理の仕方です。こういうものができたが、皆さん食わず嫌いにならずに、一つ試食してみてください。まだやると決まったわけではない。だから国会も財界もいろいろ勉強してみたらいいんじゃないでしょうか。すぐ太鼓たたいて反対に回らないで、大国民なんだから、一つ検討してみようという気持ちになってもいいと思います。

税制調査会も、その前提として不公平税制の是正を断行するよう注文はつけていますね。

大平 まずいうところの不公平税制というのは何をいうのかについてはいろいろの見解があつて、私も私なりに考えてはいます。もちろん医師の優遇税制は典型的なものだとは思いますが。しかし現在の租税特別措置がみんな不公平であると決めてかかるのには、少し私には抵抗があります。しかし一般的に私も不公平税制の是正には賛成であることは申すまでもありません。

障害物競走の時代

急激な田高ということもあるんでしようが、何かその場しのぎのやり方が目立つようですね。中長期のしつかりした経済運営がないように思うんですけれども。

大平 それはむしろ求める方が少し酷であるように思います（笑）。いままで順調な高度成長を記録してきたけれど、それを支えていた内外の条件が崩れ去り、将来の展望がきかなくなってきた。そういう時に中長期の展望がないといつて責めるのは、少し政府に酷だと思つ。いまは世界的に展望が

くりにくい、むずかしい時期です。しかし政府ばかりでなく、財界も報道界も、みんなで展望をつくる必要があると思います。しかし、それは非常にむずかしい仕事です。むずかしいが、とまかく一応やってみようじゃないか。危ない綱渡りかも知れないけれど、これで行くというものがないと仰せのように困ります。

経済というのは先を見て、きょう決心することですから、われわれがきょう何らかの展望を設定しないと経済行為はできない。いま設備投資が振るわないというのは先の展望がないからです。展望がない状態で政府が鉦や太鼓をたたいたって、設備投資をやるよう勸奨しても、それはできません。だからあらゆる知恵をしぼって、当たらないかも知れないけれど、他に道がないからこれで行こうということ、いま考える時期ではなかるうかと思えます。私は党の政調会にも、中長期の展望を勉強しようじゃないか、また小坂徳三郎君の新風研究会なんかにも、それをいっております。

よく「不確実性の時代」なんていわれていますね。日本経済問題に象徴されるように、一方を建てれば一方が立たない、そういうトレードオフの時代になっていると思うんですが、大平さんは日本経済の現状をどう考えているんでしょうか。

大平 これは見方によるけれども、人類の歴史のなかで、長い何千年という停滞期があり、高度成長というのは、ここわずか二、三〇年のことなんで、これからまた長い低成長の時代が続くという人もいる。いやそうではなくていままでほどの高度成長はなくとも、相当長く成長が続くという見方もある。金森久雄君（日本経済研究センター理事長）などは、相当成長が続くと見ているようだが、反対に下村治さん（元開発銀行理事）などはそうじゃないという全然違った見方のようです。政府はその両説のどちらにもくみしていないように思われます。政府は七%成長とか経常収支の黒字をどうす

るとかはいっているが、今後、成長はのんびきならない時代にはいったと見るべきか、相当高い成長が依然可能であると見るべきか、そこをまだはつきりさせていないようです。私自身もそのことを聞かれても、ちよっと私の能力を超える問題ですと答える以外に方法はありません。ただ強いていえば、私はこの展望についてはあまり楽観的にはなれないんです。

それからもう一つ。これは低成長時代がノーマルな時期で、こんな飛躍的な発展を遂げたのは、非常にエキセブショナルな時期である、という見方と、反対に非常に停滞した時代を例外と見る、こういう二つの見方があると思う。これもまた勝負がついていないと思うんです。この辺は、もう少し勉強しないといけない。別に逃げるわけじゃないが、問題がむずかすぎる。ただ私に何か方向をいえていられれば、私は楽観的にはなれないで、われわれは大変むずかしい時代を迎えたと思っております。だから私は最近の講演でも、いままではただランニングをしていただけだったけれども、いまは障害物競走に入った、といっているんです。ハードルがあったり、ディッチがあったり、袋があったりして、思うように走れない時代に入ったという感じがする。だから非常に骨が折れるが、その割に成果があがらない。もっともっと走りたいたいんだけど、なかなか走れない。そういう時代になったという感じです。

しかし他面、こういう時代がわれわれにとつて本当に生き甲斐があるのではないかという感じも、同時にするんです。こういう時代に生まれ合わせたことを、喜ばなければならぬようにも思うのです。もしもニケタの成長がどこまでも続き、バベルの塔が天まで届く（笑）ことにもなったら、これはえらいことになってしまつのではないでしょうか。人類の歴史を壊してしまうことになりかねないと思います。そうでなくて、むずかしいけれど、いろいろな条件を整備しながら一歩ずつ進むことがで

きるといふ喜び、これは非常なものじゃないかと思う。たいして高くない山でも、ともかく極めることのできた喜びは、飛行機から「ああ、山頂を見てきた」ということよりずっと大きい、と思う。一歩一歩やるところに意味があり、生き甲斐があると思うんです。

企業にしても真剣な減量経営をやっている。その真剣な取り組み自体が尊いんで絶望したらいけないと思う。この時代は汲めども尽きせぬ宝探しのできる時代じゃないか、というように思いたい。

自衛隊法は有事立法

最近、有事立法とか憲法改正論が、自民党の実力者から積極的に主張され論議を呼んでいます。が、この点についてはどう考えていますか。

大平 私はまず立法問題一般として考えなければいかんと思うんです。防衛庁であろうと、どの役所であろうと、どの領域であろうと、自衛隊法ばかりでなく、現行の実定法のどれにしても時代が進むに従って、不備なところが出てくるかも知れませんが、これは絶えず検討しておく必要があると思っんです。自衛隊法はもともと有事立法です。ただ兵器が発達し、時代が変わってきたので、当時はベストの積もりでも、現在では不備なところがあるかも知れん。私ども素人だから、よくわからないけれども、まずいろいろ検討してみる。検討しないでよいというのは問題だと思つ。

問題はその要否についての決定権は国会にあるということ。自衛隊がやるわけじゃない。ですからそうあわてる必要はありません。国会が判断して、防衛庁のいう通り直すべきだとか、現行法で十分だとか決めるわけです。私はまず防衛庁でしっかり勉強して 勉強しちゃんとかいうのは行

き過ぎじゃないか　その上で必要があれば国会に出せばいい。金丸信君（防衛庁長官）は国会に出すか出さないか、まだ決めていないようじゃないですか。これは私のごく常識的な意見です。

防衛庁は三矢研究以来、もつかなり勉強しているんじゃないですか。

大平　勉強しておられるかも知れないが、それを決めるのは国会です。必要があれば国会に出して判断を求めたらいいと思つています。それだけのことでありませんか。

問題の発端はいわゆる「栗栖発言」の「超法規行動」から出ているわけでしょう。そこに問題があるんじゃないかと思つんですがね。

大平　だげど自衛隊法は有事立法的にできておつて、緊急の攻撃があつたときに自衛隊は総理大臣の出動命令で出動できるだけでなく、その恐れのある時にも出動できるようになっておるんじゃないですか。だからいつも緊張した姿において、情報を十分キャッチして、総理大臣がタイムリーに下命措置がとれるようにしておくことが大事じゃないだろうか。

そうすると、改めて栗栖発言なんて必要じゃなくなる。

大平　私には特にとり上げるべき問題があるようには思えません。

法案として有事立法が提案されると、政府、自民党はメンツにかけて通そうという意思が働くでしょう。

大平　それは自民党を信頼してもらわなければならぬ。自民党としては出してならない法律は出す積もりはない。また出したにしても、どんな手をつかっても成立を期す、というようなことはしておりません。その証拠にいままでだって、いろいろな法案がずいぶん流れていますよ。十分審議を尽くし、納得すくでやりますよ。これが民主政治でね。自民党をまず信頼してよ（笑）。国会を信頼しな

いと話にならんと思っんだ。

ところが自民党の総務会長なんか「有事立法は必要だ」なんて方々でしゃべっている。そうすると、国民の受け取り方は、大平さんの受け取り方とはまた違ってくるんじゃないですか。

大平 中曽根（康弘）さんも政治家として「自分はこう思っ」という一つの示唆的な提言をしておるんじゃないでしょうか。しかしそれはそれにとどまっているだけで、具体的な行動は政府なり党なりがやるわけです。だからその発言が政府の立法準備を促して、国会に出てきたら、そのことを問題にされればよいのではないのでしょうか。

西欧支配からの転換

自民党の外交方針は、日米関係を基軸にした全方位外交ということになっていきますね。しかし、これからの世界は、やはり非同盟諸国を中心にした第三世界のウエイトが一層高くなってくると思うんですが、外相を経験された大平さんとしては、世界政治の情勢をどう見ており、どう分析しているんですか。

大平 いままでの世界は、ヨーロッパの世界でヨーロッパ人が支配するヨーロッパ的秩序の世界、またヨーロッパ文化が闊歩する世界でした。ところが、東アジアが出てきたと思ったら、こんどは第三世界、このころでは資源を持たない第四世界までが出てきている。世界は文字通り世界になったが、依然としてヨーロッパ人が強い。そこでヨーロッパ人に対するレジスタンスが、アジアやアフリカ、中南米におこってきて、世界は相当カラフルな多彩なものになってきた。いままでのように単純

な割り切り方が、できなくなってきた。文字通り世界の歴史に、われわれが参加するという時代がきた。ですから、対米関係も、これを日本外交の基軸にすることは間違いないが、こういう角度から、もう一度、これを見直して補強をしていかなければいけない。第三世界との取り組みも、ヨーロッパやアメリカの後ろから眺めるのではなく、われわれが直接もたなけりゃならんようになってきたんじゃないでしょうか。そういう意味では、外交は多次元になり、多彩になり、方々に気を配りながら、しかもパランスのとれたものでなければならぬ。それでいて一貫したものでなければならぬ。なかなか難しくなったと思いますが、やり甲斐がある時代がきたとも思います。

経済外交ということになると、東京ラウンドの場合でもそうですが、とにかく先進国が中進国を抑えようとする傾向がありますね。

大平 「東京ラウンド」は私が外務大臣のとき、東京プリンスホテルでガットの総会を開いたとき、私がチエアマンをやった。それで東京ラウンドの「東京宣言」の採択を、私が議長としてやった。あのときジスカールデスタン氏もフランスの代表できていた。相当異論はあつたけれど、ともかく総会で採択したものです。ところで、中進国を抑えるということですが、それよりもむしろ問題は先進国が、世界に向かって自らの経済を開放していく努力が必要だと思ふんです。それをどう実行するかにアクセントをおいて、そういう方向にもっていかないと世界経済は萎縮してしまふ。

それからもう一つ、市場原理の他に、別の原理がある。保護、統制の原理です。一生懸命に自由化をやりながら、本体を強めていきながら、他方において開発途上国を保護していく。開発途上国を援けるためには、先進国の力が強くなってはできない。だから先進国間ではできるだけ自由なルールの

下でお互いの力を養うことが大切です。

日中平和友好条約がやっと締結されましたが、問題はこれからの対ソ外交ということになりますね。その基本姿勢はどういう点ですか。

大平 もちろん対ソ友好ですよ。昭和三二年に「日ソ共同宣言」で国交が回復して以来、日ソ関係は政治的にも経済的にも文化的にも非常に進んできたと思う。相互理解も非常なテンポで進んで、相互の関係はよくなってきたと思います。ソ連も日本との関係改善をさらに求めていると思います。そりゃ中ソ対立の中で日中が仲良くすることは愉快でないかも知れない。しかし日本はなすべきことをなさなければならぬ。同じように日ソ関係も、どこが何とおうがちゃんとやればいい。そういう態度が必要であると思う。

ソ連との関係では北方領土の問題が未解決として残っていますね。

大平 日本は、日本の固有の領土であるという見解をもち、ソ連は違った見解をもっている。日本は自分の考えは間違っていないということで執拗に今後も主張していくことでしょう。両国の関係はこういう問題があっても、その試練を受けながら、理解が深まっていくのではないのでしょうか。

ソ連が求めている善隣友好条約についてはどうなんでしょうか。

大平 日本は領土を返してもらって、平和条約を結ぼうという方針ですが、それを棚上げにして善隣友好条約でいこうということは、領土を未解決のまま棚上げする決意がつかない限りできないことです。それは究極において政府や国民が考えるべきことです。

手応えのある人生を

教育について伺いましょう。

大平 経済的成功の方便として教育を考えてはならない。われわれはもっと内面的に発掘しなければならぬものが沢山あるし、目に見えないところの価値あるものを見出していくような努力をしなければならぬ。教育の機会が豊富になるとか、教育の水準が高くなるとか、設備が充実することも大事かも知れない。しかしそのようなことは相当できた。これからはもっと目に見えないものに目を向けて、精神的な尊厳とか、宗教的な信仰とか、謙虚さとか、献身とか、そういう美徳をもっと追求していかなければならないと思います。生活はそんなに高くなっていいけれども、思想は高い方がいい。私はよくシンプル・ライフというんだが、『太った豚よりやせたソクラテス』の方がいい。その辺のところを心得たものになりたいものだ。

形だけの英才には用はないというわけですね。

大平 そうです。

人生というものをどう感じられますか。

大平 えらいことです（笑）、人生は。しかしまあ、毎日毎日が、何か手応えのあるものであって欲しいと思っています。ハイカラな言葉でいうと充実したもので、そういう人生が欲しいと思います。

大平さんは、花というものはいつか枯れるんだ。しかし、水をかけてやると生き生きしてくる。水をかけること自体が人生なんだという話をされた、ということを書きましたが……。

大平　バラの木はいつか枯れるに決まっているんだから、いくら水をかけても無駄だというのではなく、毎日毎日、水をかけること自体が人生だ、この営み自体、そのプロセス自体が人生だ、ということをお願いしたかったわけです。私は歴史というものは、そういうものじゃないかなと思います。

(昭、五三・一〇・一七)